

海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1990 7,8

■ ランポン再訪の記(下)

■ 皮革製品になったインドネシアのネズミ

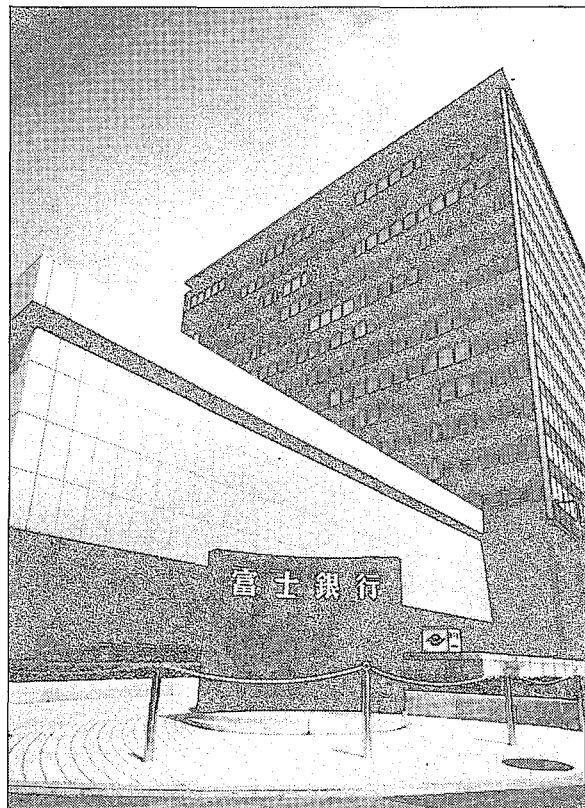


将来への礎石。

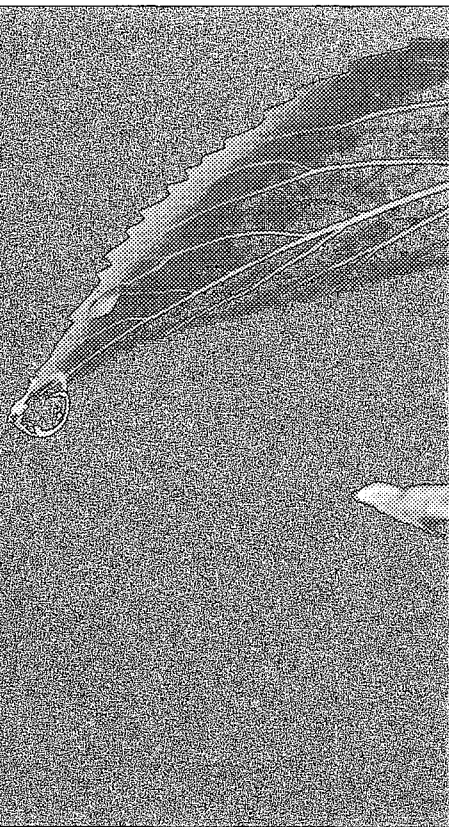
いま未来を見つめて、〈富士〉はみなさまのお役に立つよう力をつくしています。経済の発展に資すべく、多様化するニーズを的確にとらえて歩みつづける〈富士〉。暮らしに、経営に、多岐にわたる〈富士〉のサービスをご活用ください。

みなさまの

 **富士銀行**



大きな夢を育てたい。



《日債銀》は、みなさまの有利な財産づくりのお役に立つワリシン・リッシンを発行しています。また、産業からご家庭まで安定した長期資金を供給することによって、明日のゆたかな社会づくりに貢献しています。

高利回りの1年貯蓄

ワリシン

高利回りの5年貯蓄

リッシン

日本債券信用銀行

本店／東京都千代田区九段北1-13…☎102 ☎263-1111
支店／札幌・仙台・東京・新宿・渋谷・横浜・金沢
名古屋・京都・大阪・梅田・広島・高松・福岡
ロンドン・ニューヨーク支店／駐在員事務所：ロサンゼルス・ペイロード・フランクフルト

目 次

1990—7, 8

ランボン再訪の記（下）	1
-------------------	---

ネズミ情報

皮革製品になったインドネシアのネズミ	14
--------------------------	----

「海外農林開発協力促進事業」制度のご案内	17
----------------------------	----

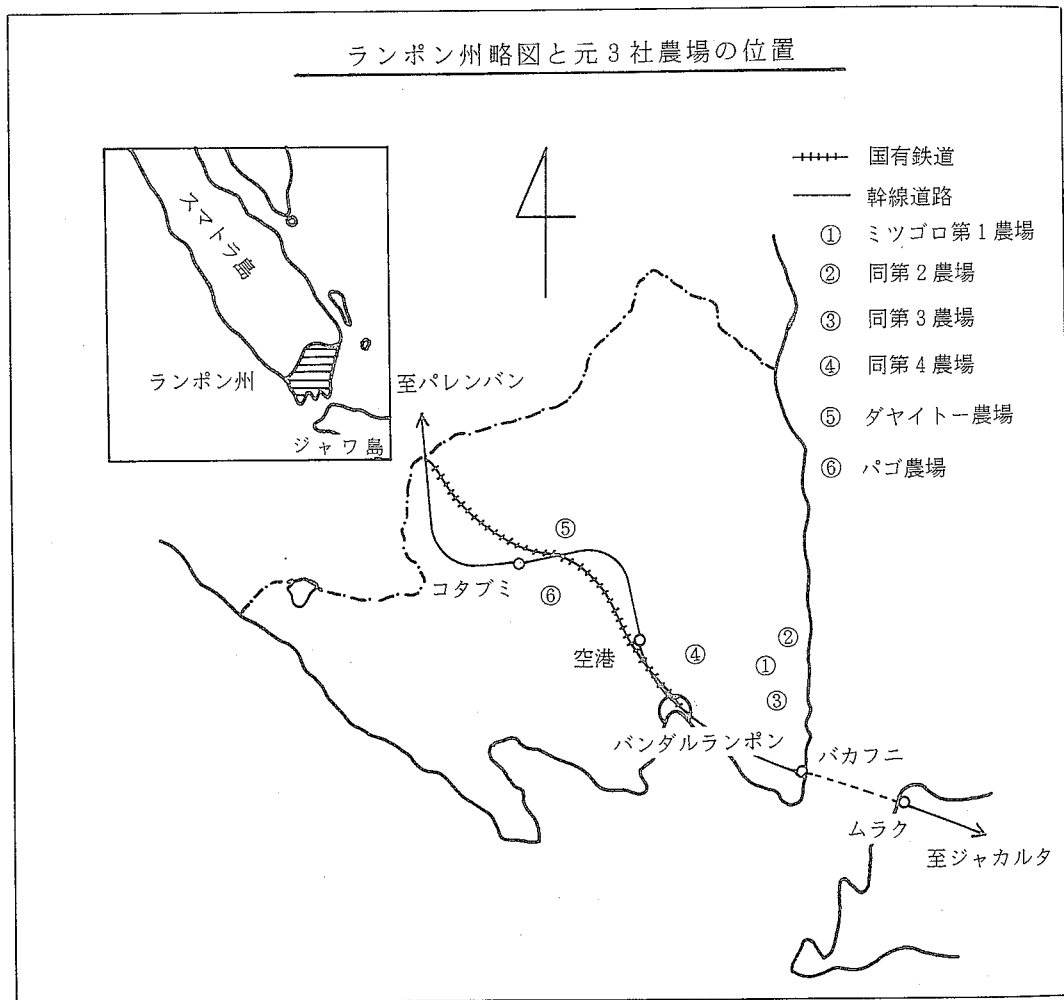
会 合

アジア経済研究所・月例講演会	19
----------------------	----

国際農業機械化研究会・第18回海外講座	19
---------------------------	----

ランボン再訪の記(下)

(社)海外農業開発協会専門委員 野飼 実



□ジャカルタ経由ランボンへ

今回、ランボンを訪ねるにあたって、旧ダイトー農場開設前の1970年当時に自身で書いた調査記録を読みかえしてみた。そのなかに「この平和な農民たちの生活を我々の事業によって乱したくないような気がする……」と感想を述べているくだりがある。しかし、まもなく農場は開設され、1983年の閉鎖まで私もこの事業に従事した。

事業展開地の権利をインドネシア政府に引き渡し、その跡地を移住地にするという同政府の計画を受け皿にして閉鎖、撤退をしたのだったが、自らのことになると帰国後もずっと「心」の撤退ができないでいた。

いろんな思いがかけめぐる。ダイヤトーの事業についての是非は、それぞれの立場によっても見解は分れよう。が、農場の責任者として日々現場で作業する人々に接してきた私には、経営や農業技術がどうだったか、といった問題以上に彼らの消息が気になるのである。

帰国後、しばらくして「証言・熱帯農業」(1987年古今書院刊)の執筆者の1人としてダイヤトー農場の自然環境、栽培作物等の分野を担当したおりに、「農場を解散して帰国後早くも3年になる今日でも、たとえ割増しの退職金を支給したものの、従業員はどこで現金収入を得ているか、どんな生活を送っているであろうかと、胸が痛む」と書いたのも、そんな日ごろの思いがあるからであった。

日本の大商社が経営するミツゴロ、パゴ、ダイヤトーの撤退は1983年から84年にかけてであるが、この時期3社とも内に土地、経営、パートナー、累積債務など、さまざまな問題をかかえていた。また、外部には日本国内の景気後退、インドネシアの原油価格の下落という経済にかかる暗雲が低く垂れこめていた。

これら内外諸要因が重なったため、本社は農場経営が商社体質に合わない判断し、採算の悪いこの事業を切り捨てたのであろう。私はそのように解釈している。

撤退時、インドネシア政府との合意事項のなか、残される現地従業員の扱いをいかにするかについては、政府が農場跡地を移住地とするおりに優先入植させる、とした。したがって、入植を希望する従業員は、他に就職するなり部落に帰るなどして時期の来るのを待たなければならない。果たしてどのように進展していくのだろうか。近くに入植した政府計画移民や自発的移民の実情を聞き及んでいただけに、私の心配は続く。

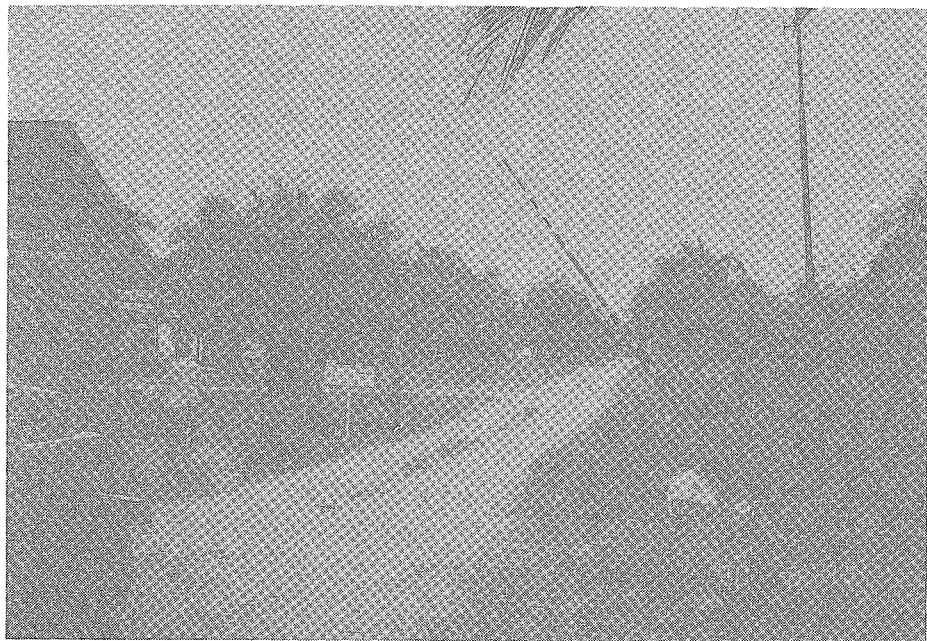
そんなおりに、元マネージャーのサンジャヤ氏が前号でも記したようにクリスマスカードの片隅にダイヤトーの元スタッフは旧農場跡に入植し、家、土地をもらって幸福に暮している、と伝えてくれたのである。私にとって、これ以上の朗報はない。長年の胸のつかえが一気に吹き飛んでしまうほど、嬉しくなってしまった。

過去に旧ダイヤトーの関係者の何人かが入口にあたる門のところまで行っており、農場は昔のままとか、入口近くワロン(小さな雑貨店)が建て替えられたとか、建屋・設備はすっかり荒れ果ててしまった、とかの話は聞いている。しかし、詳しい状況となるといずれもはっきりせず、特に旧従業員の消息となるとサンジャヤ氏以外つかめないでいたのである。

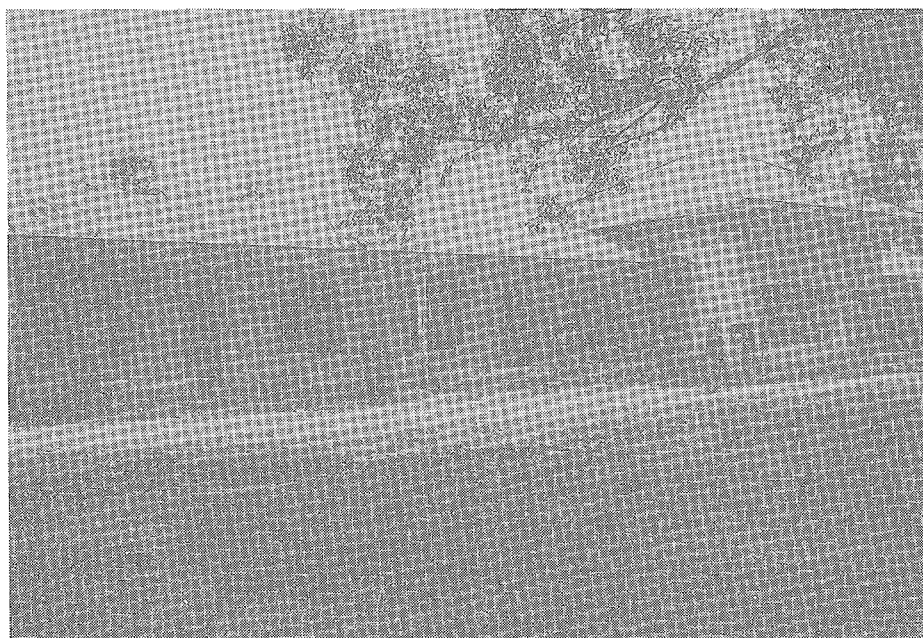
旧従業員の入植が確認できたいま、私の思いは堰を切ったように現地へと向う。農場は元のアランアラン草原に戻っていないだろうか。もし、そうでないとしても長年培った畑の生産力は低下してしまったのではないか。入植したといっても場所によって条件は違う、どの辺をもらったのだろうか。作物は何を選び、それが現金収入に結びついているのだろうか。彼らが元気で農業を営んでいるのなら、農場で指揮した経験者として激励のひとつぐらいはしてあげたい……。

老兵をして妻共ランボンへ行く気になったのは、おおよそ以上のような理由による。訪問時期は6月中旬から下旬にかけてとしたが、実現のためのお膳立てをしてくれたのはサンジャヤ氏である。コメの収穫も済み、レバラン(断食明けのお祭り——インドネシア最大のお祭りで日本の正月に相当)も終り、年を通じ現地が最も落ち着くこの時期の訪問は、相手方にも都合がよいであろう。

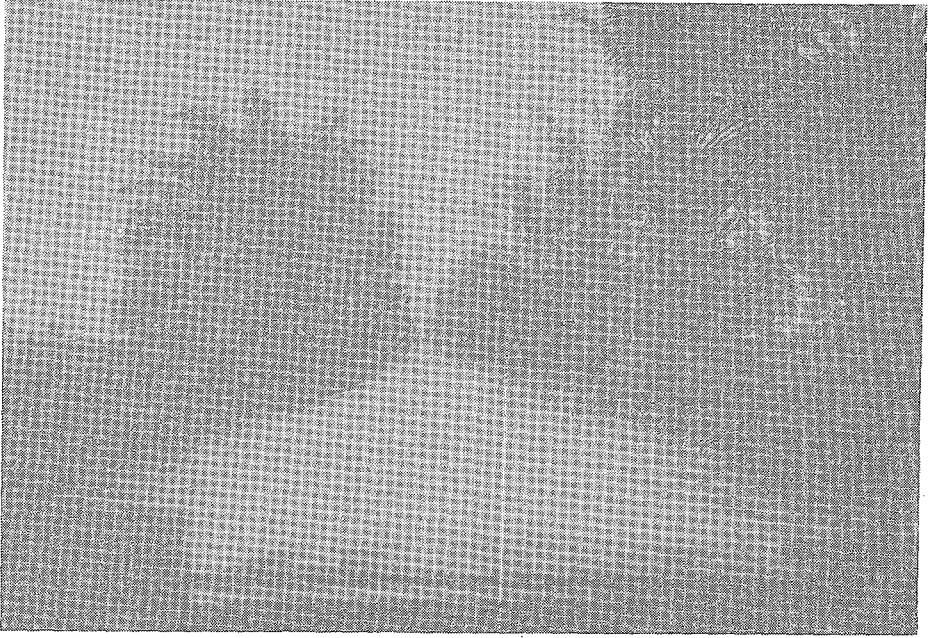
ジャカルタ経由でバンダルランボン入りした私たちは、ここを6月17日の朝早く出発し、テルクベトンの元の事務所や旧ミツゴロの事務所をみて一路西へ向う。途中、タンジュンカラ



往時と変わらないダイトーの正面入口



筆者が住んでいた宿舎（窓のガラスは全て破られ、ダンボールで補修してあった）



立派に成長していたオイルパーム並木（ユニット1より先へ1kmほど進んだ付近。
両側の畑にはキャッサバが植えられていた）



残骸になってしまっていたユニット2の乾燥室と倉庫

付近の景色は大幅に変化していたが、ここから先はほぼ住時のまま。車上から所々に散在する部落を外見し、比較的大きな川に懸ったいくつかの橋を渡っていると、在職中、何十回、何百回も往復した道だけに、現在地は誰に聞かなくても頭の中の地図が知らせてくれる。

ナタール、ブランティを過ぎると次はテギネナン。ここにはJICAの人たちが取組んでおられた農業普及（タニマムール計画）のセンターがあるのだが、日曜日とあってか人影は見られない。

途中、バンドルジャヤで当時のスタッフの一人、スバリ氏が住んでいるというので横道に入って彼の家を探す。結局見つからなかったが、道草のおかげとでもいおうか、元の大通りに引き返したところで、私たちを探している予期せぬ人たちを乗せたジープに出会うことができた。この人たちはダヤイトーの初期のころの従業員4人とその家族。ダヤイトー退職後に華僑系の農業会社「ムルテアグロ」に就職したが、引き続きここで仕事をしているようだ。

こんな路上で再会できた事情を聞いてみると、なんとサンジャヤ氏がこの日に私がダヤイトーの跡地を尋ねる旨、彼らの1人に手紙で知らせてくれていたのである。彼ら4人と家族は私に会うため、途中のバンドルジャヤで待機してくれていたものの、到着時間が判らないため、朝から道路を行ったり来たりしながら、通る車に注意していたという。

彼らがダヤイトーにいた当時をふり返ると、あまり待遇はよくなかったし、私たちにいつも叱られてハッパをかけられていたはずだ。それがこうして会いに来てくれるとは、もとより心が大きいからなのか。とにかく感激させられた。ダヤイトー跡地まで同行してくれることになったが、その前にフィルムを買い、食事をするというので、とりあえず私たちだけで先行。

バンドルジャヤの外れからパゴ農場に通ずる道は舗装されたので、スルスブアンまでは30分で行けるという。

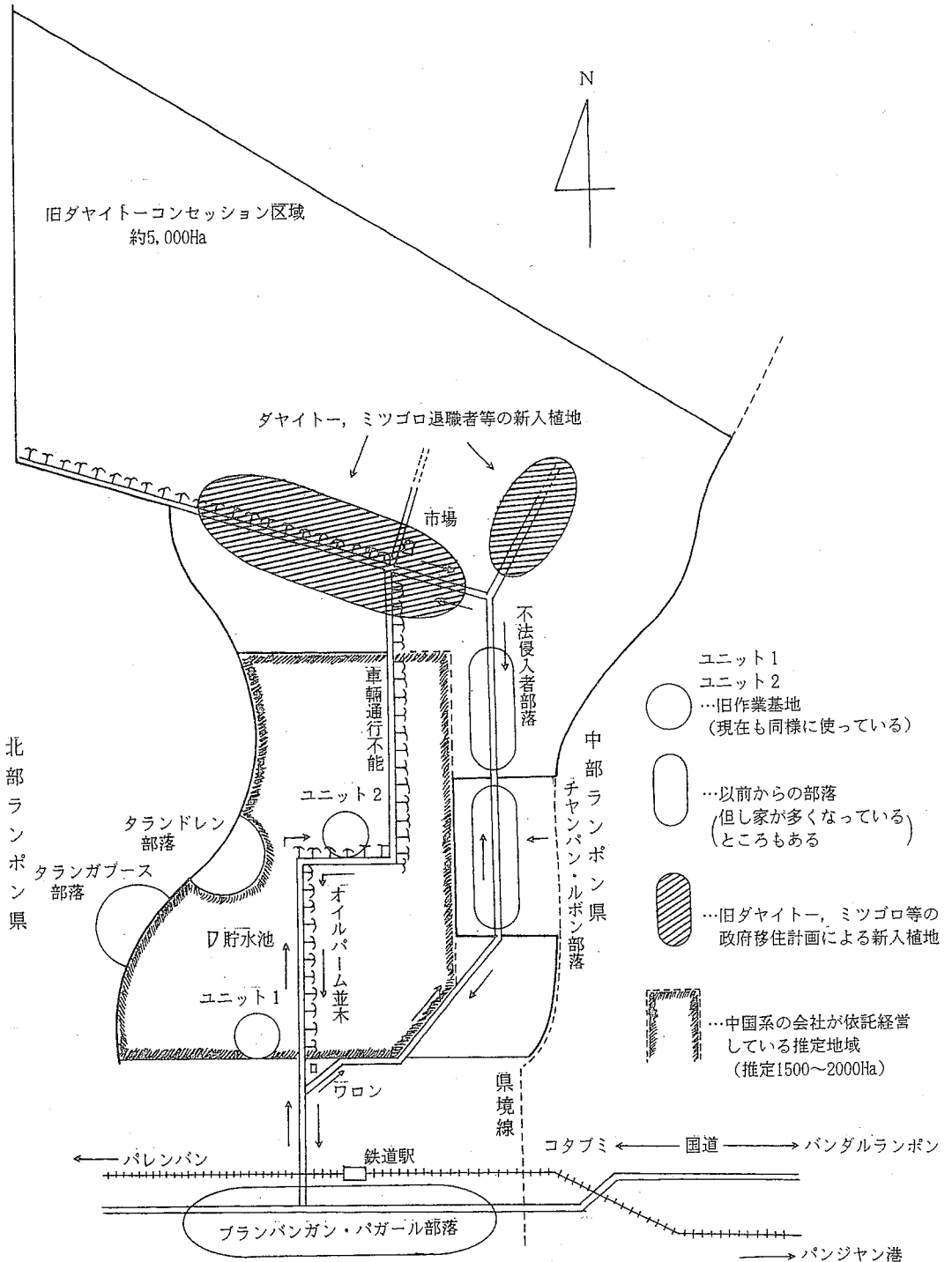
ここには日本政府の援助で甘藷からアルコールを作る試験工場がある。できたアルコールをガソリンに混ぜることで、少しでも輸出用の原油を確保したいという考えから、通産省の指導でできたものであるが、このプロジェクトに対する現地の評判はいまひとつよくない。そもそもこのプロジェクトは、甘藷が3ヵ月で成熟すれば1年3回以上の収穫が可能で、原料にしてキャッサバの3倍以上になるとする計算（熱帯農業の経験者が当プロジェクトの立案者のなかにいたのであろうか？）から、甘藷を利用する設備にしたのだという。計算上はそうであっても、自然相手の農業である。結局、甘藷はアリモドキゾウムシにやられ、キャッサバに原料を変更せざるをえず、設備の改造も行なわれたそうである。いまさらながらこの種の試験事業の難しさを痛感する。

この地を離れて、スнгаイブディの横を通る。ここにも華僑系のキャッサバ澱粉工場があって、以前は廃水をたれ流しにしていたため、下流住民の暴動を誘ったのであるが、今ではクエン酸工場が稼働し、廃水は殆どなくなっていた。さらに西北に進むと鉄道の踏み切りにぶつかり、その先はいよいよ北ランボン州になる。

□生きていたダヤイトー農場

私たちのかつてのダヤイトー農場は、北ランボン県ブランバンガン村の行政区域のなかにある。北ランボン県に入ると2kmほどでブランバンガン、パガールの2部落を見るが、ランボン州にはブランバンガンと称する部落が他に2つあるため、当地では隣り合った2つの部落を併せ「ブランバンガン・パガール」と称して区別している。ブランバンガン・パガールの部落は、7年前、いや、20年前とほぼ同じ姿をとどめていた。部落の中央から右に以前の私道を2kmほ

ダイヤトー農場跡地利用概略図





農場入口横にあるワロン（小雑貨店）

ど行けばダヤイトー農場跡に到着する。この村の当時の村長は、私たちダヤイトーの人々の間では悪徳村長として名高い人物であった。何かといえば金をせびる、ガソリンをもらいに来たかと思えば、自動車だって平気で借りに来る等々、ずいぶん悩まされたものである。このムスターファ・ガニー氏も3年前に病気で他界したという。かつてガニー氏の父親が亡くなったとき、写真を撮ってほしいと頼まれ、葬式の始めから終りまでをフィルムに収めて進呈したことを思い出す。村外れの道路わきにある墓の前を通るとき、父親のそばで眠っているであろうガニー氏に対し、合掌して冥福を祈らせていただく。

ブランバンガン・パガールからコタブミ（北ランポンの県庁所在地）に出ると、町の入口近くにワイラレムの灌漑路が満々と水を運んでいた。これも日本の援助によるもので、下流数万ヘクタールの田圃を潤している。

コタブミで土産用の加糖練乳を買ってから再びブランバンガン・パガールにもどり、ダヤイトー跡に向ったが、横道の道路は7年前とちっとも変っていない。一番近いところに農場の大工氏の家があり、顔を出したが仕事に出ていて不在。奥さんに土産を渡してから次に元守衛長のイリアス氏宅へ立ち寄った。彼はすっかり歯が抜けて、外見年寄りくさくなっていたものの、どうして社宅に住んでいたころの先妻が亡くなった後、新しい奥さんをもらい、しごく元気のようす。帰りぎわ外に出たところで元守衛のバンダル氏が孫を連れて散歩しているのにも出会う。旧ダヤイトーの入口に到着してみると、門、守衛室は往時のままの姿をとどめていた。アランアランと竹壁で作ってあった、ワロンは、人伝えに聞いていたとおり、レンガ建て、カワラ屋根に変身。私たちがジープから降りるとワロンの主人、奥さんが満面に笑みを浮かべ、“スラマツシアン！”（こんにちわ）と言いながら手を差し伸べてきた。

門を入ってすぐの左側はユニット1。私たちの住まいもここにあって、住居はそのまま残っていたが、近ずいてみると窓ガラスは破れ、それを段ボールで補修するという状態で、見るからにみすばらしい。ちょうど昼どきで人影が殆どなかったことも手伝ってか、一層淋しい気持ちにさせられた。また、住居前は当時ブーゲンビリアやパパイアを植えて庭園にしていたのだが、ブルドーザーで整理してしまったのであろう、それらの花・果木はなく、オイルパームとユーカリだけがやたら大きくなっているのが目につく。

畑はキャッサバ主体の作付けで、一部メイズも植付けていた。メイズは耐病性、増収品種が開発され、農家でもHa2トンの収量が得られるという。ただ、耐病性ハイブリットについては種子が高価なので、なかなか使えないのが実情らしい。

ユニット1内にあった倉庫、修理室、それに社宅数軒は今でも使用されているそうだが、見たところ種子倉庫は屋根の亜鉛鉄板が盗まれ、倉庫の用を足していない。わずかに種子乾燥用のコンクリート床がメイズの乾燥場に利用されていた。

旧ダヤイトー農場の主要耕作地は、華僑系の会社に引き継がれていたもので、当農場管理人の許可を得て作業の中心地であったユニット2まで行くことにした。この間の道路の敷石は当時のまま。農場作りの初期の段階に、私の先任者の指揮のもと、山の石をひとつひとつ人力でコブシ大に砕き、雨季でも車の通行に差し支えないよう敷きつめたものである。一方、道路両側に植えたオイルパームは驚くほど大きく成長していた。1976年に発芽種子から育て、一部をテスト畑に移したほかは、この道路の並木として10m間隔、16kmにわたり植え付けた。ここに立つと、そのときの作業風景が眼に浮かぶ。当時はダヤイトー農場の作付け計画のなかにオイルパームがなく、また、かりに作付けしようとしてもインドネシア政府の許可を得なければならぬといった問題もあって、植栽をあきらめたのだったが、いま成木樹を目の前にすると、もし、あのときオイルパームの農場にしていたなら今ごろは……。こんな皮算用がついつい脳裏を走る。

進行方向まもなく左側に1970年の調査当時、住民よりココヤシの果汁をごちそうになったタラングブスの部落が見えてくる。在職中、同部落の前を流れる川をブルで堰止め、灌漑用の貯水池をこしらえたのだが、減水していたためか、車上からの確認はできなかった。このあたりから道路の左右にキャッサバ畑が広がる。当時メイズを植えていたところで、概観した限りでは畦立、除草剤使用、それに肥料もよく施されている。葉の色つやもきわめて良好。

熟土にすることを目標に10年間、苦心してメイズの茎葉を耕込み、深耕したその畑で他の会社がキャッサバ栽培をしている。時移り、組織・人は変わっても私たちの農場はたくましく生きていてくれた。

それにしても、今日この土地で大々的にキャッサバ栽培ができるのは、アランアランの土地を開き、土壌を肥沃にした旧ダヤイトーの人々の苦勞があって出来ること。そんなふうに解することで、自分を納得させたいというのも正直な心の内である。

ユニット2までの道路の曲り角に位置するタランドレンの部落を囲む樹木もうっそうとするまでに成長していた。ユニット1からユニット2までは距離にして4kmほどだが、デコボコ道のため、所要時間20分。着いて驚いたのは、撤退時のどさくさにまぎれて盗まれたものか、ユニット1と同様、当時の施設の多くが荒れ果ててしまっていたことである。

種子乾燥倉庫として作ったプラスチック屋根の倉庫は跡形もない。隣り合って建てた製品倉庫とドライヤー室の亜鉛鉄板の屋根は共に剥ぎ取られている。ドライヤー室のなかにあった米

国製ドライバー1基と機械担当の日本人スタッフが苦心して作りあげたドライバー1基も赤錆びて放置されたまま。発電室は変わらないと思いきや、よくみると送電線がなくなっている。確認はしなかったが、おそらくなかの発電機は除去させてしまっているのであろう。

ざっと見ただけでもこんな状態だが、数台のトラクターが置いてあったことから、いまでもユニット2が作業の中心になっているようである。

作業員は昼休み中とあって、数名が作業小屋の前で休憩していた。こんな光景は別に珍しくないのだが、なかの1人が私を知っているらしい。愛敬のある素振りで声をかけてきたもんだから、こちらもヤアヤアなんて返したものの、少々戸惑う。すぐには誰だったか思い出せなかったのである。しばしその場で記憶をたどったのだが、思い出してゾットした。

この男、名前をここではAとしておこう。彼は、前述したタランガブース部落前の貯水池にランボン人の守衛が死体で浮くという殺人事件のオりの共犯者の1人であったのである。死体は刃モノで切られ、竹槍で突かれる残忍な殺されかただったそう。このとき私は農場におり、トラクター運転手の元締めをしている現地人スタッフにジープの借用を申し込まれ、許可をしたが、近くでこんな事件が起きているとは露ほども知らなかったのである。この数日、具合いを悪くして欠勤していたトラクター運転係のAのため、ジープに医者を乗せ往診してもらったのだが、医者はAの身体が切り傷だらけだったのに不審を抱いたらしい。村長に知らせ、村長から警察へ。警察の取調べの結果、主犯格と共犯者のAを含め4、5人のジャワ人が逮捕される。

この事件は色情問題のこじれから起きたと結論されたが、根はもっと深いところにあったのではない。私には人種の対立が殺人事件にまで発展してしまったように思えてならない。当時、ランボン地区の開発が進むにつれ、古くからこの地に在留しているランボン人と新しく土地を獲得、移民として入ってきたジャワ人の間はぎくしゃくし、両者のトラブルも珍しくはなかった。

Aの刑は懲役2年。事件から10年以上が過ぎ、Aもすっかり中年になってしまっていたけれど、ダヤイトーでの経験を活かし、元気にトラクターの運転をしているというのだから結構なこと。今度こそしっかりやってもらいたい。

ユニット2より奥へ進む道路は補修が行なわれておらず、車が使えないので、いったん入口横のワロンのところまで引き返す。ワロンの主人がダヤイトーの旧従業員や身内が入植している移住地に案内しようと言ってくれていたので、主人を乗せ、今度は先ほどのユニット1とユニット2を結ぶ道路の右側の道から行くことにした。この道路は境界線に沿って中部ランボンのバンダラムジラハユー村へと続く。道路から左に折れ、チャンパン・ルボンに行く道である。かつて未舗装だったが、今はチャンパン・ルボン部落付近までが簡易舗装され、その先は移住地まで碎石が敷かれていた。

チャンパン・ルボン部落の先には隣り合うように、かつて不法侵入者が多数入りこんだ部落がある。そこを通り抜けると建築中の家屋があり、その前でバンダルジャヤで会ったムルテアグロのジープが待っていてくれた。先ほど留守だった大工のスバリ氏と弟のイトハム氏がこの建築現場で働いており、私を見つけると飛んできて握手また握手。

ジープが2台そろったところで、新たに大工兄弟も乗せて最終目的地の移住地へ向う。移住地は、先に車での通行が不可能で引き返したユニット2のオイルパームの並木道路と一緒に西北方面を中心に展開していた。

入植者たちの主要栽培作物は、キャッサバとメイズ。ダヤイトー時代、低湿地のため雨季に

は放置していたところも天水田ながら水田として活用していた。

私が在職中、最も多く作付けしたのはメイズであったが、これには苦勞した。74年の赴任当初、200Haのメイズ畑をベト病で全滅させてからというもの、ベト病対策に明け暮れたものだ。それに比べ今では優秀な耐病性品種と耐病性ハイブリッドが開発されているのだから、隔世の感がある。入植者たちの畑で作られているメイズは、ベト病の発生が殆どなく、肥料も十分に施しているようで生育は良好（現在肥料価格は尿素、重過石とも1kgでメイズの1kgの $\frac{2}{3}$ 位に押さえられている）。

移住者の住居環境もまあまあに見受けられた。入植者の家がオイルパーム並木の両側に建ち並ぶのは、道路があるのだから当然としても、ここ10年ほどのうちにオイルパームが人々に木陰と緑を与えるまでに育ち、新たに建てられた家々の姿も含めて、ダヤイトー時代とは随分と違う景観を創り出している。並木のなかでもこの辺のオイルパームは植え付け当時、周辺を開墾中で、アランアランを焼くための火がオイルパームの下葉も焼き、生育にかなりのダメージを与えてしまっていた。それが今日他に引けを取らないコストになっているのである。植栽を行なったときの責任者として、内心立派に成長した子供に出会ったような晴れがましい気持ちにさせられた。

また、パサール（市場）もできあがっていた。これは、移住者同士の経済活動が活発であることを物語るものであろう。

□入植した元従業員達と再会

ダヤイトーの乗用車の運転手だったスロソ氏の家に着く。奥さんは案内をしてくれているワロンの主人の娘で、次男もここに入植しているという。現在のスロソ氏宅はなかなか立派なもの。レンガ建て、カワラぶき、広さも120~130㎡はあるのか。15畳は裕にあるとみられる客室で、途中合流した人も含め、私たち一行10数人はお茶の接待を受ける。

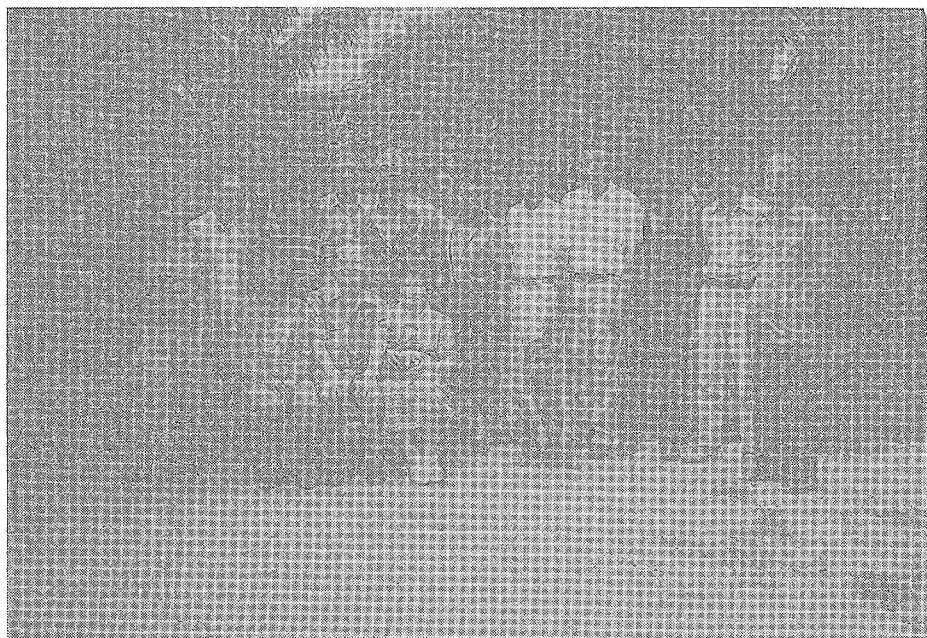
スロソ氏の家の近くに入植した旧ダヤイトー農場の従業員も5人ほど集まってくれたため、まるで往時にタイムスリップしたよう。思い出話に花が咲き、大いに盛り上がる。

旧ダヤイトーの従業員が移住地に入ったのは1985年だというから、畑も熟畑になりつつある。また、他の会社等に勤めた人も、それ相応の地位についているようだ。1960~1970年ごろの移住地は棄民に等しい待遇が普通だったが、ここダヤイトー跡地に移住した人たちの姿を見る限り、痛ましさは感じられない。みんな私が想像していた以上に健闘しているのである。

忘れていたことまで含め、いろんな話しが次から次と飛び出す。別に脈絡があるわけではなく、ただワイワイと各人思い出すがままに喋っているのだけど、これがなんとも楽しい。そのうちの1人が私に向かって「いまトワン（男性に使う尊称）の顔を見て思い出したんだけど、あのころは毎月借金を申し込み、いく度となく助けられた。あれはイイもんだ。せっかくの機会だから、当時にかえてまた借金をお願いをしようと思うんだが……。」

たしかにあのころは現地従業員の大半が私に借金を申し込んできていた。経済的に貧しかったことも原因しているようが、皆若かったから浪費も多かったのであろう。回収してもまた翌日には借金に来るという自転車操業者がたくさんいた。

こちらで冗談で応える。「私はすでに退職した身なんだけど、どういう行き違いか君にだけ知らせていなかったようだ。昔の好誼で望むだけ貸してあげたいとは思いますが、日々自分の小遣いにも不自由しているのが実情なんだ。私が帰国してしばらく会わないでいた期間、君は随分と仕事を頑張り、おカネの方もたまりすぎたというじゃないか。どうだい、今度はひとつ私に借



入植地スロソ氏宅前で記念撮影（前列中央が筆者、右が妻）

金を申し込ませてくれないかね。いくら借してくれる？」

客室ははち切れんばかりの爆笑。こうして笑えるのも、それだけ各人の生活に余裕ができたからであろう。

旧ダヤイトー閉鎖時の従業員40数名の消息について聞いたところ、最終的に20名ほどがダヤイトー農場跡地に入植し、他は出身部落に戻るか他の会社に就職。入植者のなかで現在農業を営んでいるのは10数名。また、当移住地には旧ダヤイトー関係の移住者の2倍ほどにあたる人たちが旧ミツゴロの第3農場等から移住してきているという。

懐かしい話しはいつまでも終りそうになかったが、バンダルランボンまで帰る所要時間を考えると、そろそろ暇しなくてはならない。コタブミで土産用に買ってきた加糖練乳（1缶400gの値段は当地方の一般労働者の日給1,500ルピーに相当する高級品。コーヒー、紅茶などの飲みものに使う）を1人2缶あて進呈、同席できなかった人の分もスロソ氏に託し、うしろ髪引かれる思いで移住地を離れた。

別れぎわ、皆が言葉を合わせるように「今度はいつ来るのか？」と尋ねる。「生きているうちもう一度うかがわせてもらいたい」と答えると「来年も必ず来なければいけない。約束をしろ」と言う。

私は当地での農場創りに失敗はしたけれど、現地の人々との友情だけは養い育てることができたようだ。

（注1）ランボン3社について

ここでいう3社とはインドネシア共和国スマトラ島ランボン州で展開された三井物産の「M

ITSUGORO農場」、伊藤忠商事の「DAYA-ITOH農場」、三菱商事の「PAGO (Padangratu Agricultural Corp.) 農場」を指し、自らで短期作物を生産、日本へ輸入するという、いわゆる「開発輸入」を目的に出発している。

最初に進出したのは三井物産で、現地の民間団体コスゴロと組み1969年に合併で「ミツゴロ」を設立、南ランボン県に第1より第4農場まで4つの農場を拓く。コンセッション面積は4農場合計で約5,000Ha。

伊藤忠商事は1971年、北ランボン州に現地資本との合併で「ダヤイトー」を設立。コンセッション面積は約5,000Ha。

三菱商事は1973年、中部ランボン州に現地資本との合併で「パゴ」を設立。コンセッション面積は約8,000Ha。

3社は地域内で開墾できるところは農場に変え、それまで放置されていたアランアラン草原を緑の畑地にしたが、3社とも経営面では採算がとれず、試行錯誤と悪戦苦闘の末、1983年から84年にかけ事業を停止、会社を解散して撤退した。

(注2) インドネシアの移住政策

インドネシアの人口は1986年現在推定で1億6,800万。このうち1億人が国土の7%の面積を占めるジャワ島に住み、ジャワ島の人口密度を世界有数にしている。また、イスラム教の慣習から農地が細分されている。1984年の中央統計局調査によれば、ジャワ島の農村の一家族当りの所得は730US\$で、貧困ライン(540US\$)以下の家族が40%を占める。一方、外領では土地の肥沃度は低いものの経営規模は大きく、人口密度は小さい。非農業資源にも恵まれている。

したがってスマトラ、カリマンタン、スラウェシの移住受入れ地域はジャワ島に比べ家族当りの年間所得も1,000US\$と高い。

移住戸数実績

年	スマトラ	カリマンタン	スラウェシ	イヤンジャヤ	計
1950~54	20,400	1,400	500	0	22,300
1955~59	28,900	2,600	700	0	32,200
1960~64	21,000	4,500	1,000	0	26,500
1965~69	16,500	2,100	2,700	300	21,600
1970~74	22,000	6,000	11,400	100	39,500
1975~79	33,000	11,000	9,000	2,000	55,000
1980~84	227,100	70,600	51,700	16,600	366,000
1985~85	58,200	42,000	21,700	13,200	135,100
1986~87	16,419	7,416	3,771	2,298	29,904
1987~88	14,093	9,130	2,181	2,985	28,339
計	457,612	156,746	104,652	37,483	756,493
%	60	21	14	5	100%

移住事業はジャワ島と外領との社会的、経済的バランスの是正を促進し、資源の有効利用、国家の経済発展にも寄与するものと考えられ、既にオランダの統治時代より行なわれている。スハルト現政権の累次開発の5ヵ年計画でも移住は重点政策の一つである。それによれば、5

年以内に自主独立を達成させるため、移住に際して政府が開墾を行ない、家を建て、1年間の食糧を支給するなどの補助を与えている。

移住者はジャワ、マドラ、ロンボック地域で募集される。現在までの移住者数は上表の通り。

移住者はスマトラおよびカリマンタンで全体の80%を占めている。移住に必要なインフラストラクチャー等は移住省によって整備され、移住後は農業省等によって管理される。

従前の移住は、経済・財政上の事由等から受皿づくりが十分でなく、そのため、入植後、政府の補助が得られなくなった3~4年目ごろに脱落し、ジャワ島に舞い戻るケースが多かったが、近年はこれらの問題はかなり改善されているようである。

なお、移住地でもスマトラ、カリマンタンのようなジャワ島に近いところは開墾も進み、定着率は高いが、立地条件の悪い遠隔地は、政府、移住者の双方にとって、依然厳しい状況にあるものと思われる。

(注3) 華僑

本文中で私は中国人(たとえば私のランポン行きをお膳立てしてくれたサンジャヤ氏のような人)の2世、3世を中国系インドネシア人、あるいは「華僑」と称した。また、これらの人たちの経営する企業についても「華僑系」とした。

第2次大戦後、中国が社会主義化したこともあって、華僑たちは帰国をあきらめ、東南アジア各国の国籍や市民権を取り、その国への定着を図り、その国の政治にも参加するようになった。したがって彼らは自らを「華僑」ではなく「華人」と呼ぶべきだと主張するようになり、今日、「華人」の呼称は現地のみならず、日本でもよく使われはじめている。

ただし、英語ではOverseas Chineseまたは単にChinese、中華人民共和国でも引き続き「華僑」が多く使われている。

私は従来 of 日本における慣用にならい「華僑」としたが、もとより「華人」でもさしつかえない。



ネズミ情報

皮革製品になったインドネシアのネズミ

L. Bムルダニ將軍は、官房長官の職にあった1980年代中ごろ、ジャワ島の耕作地に被害をもたらす野そ退治に軍隊の協力を呼びかけたことがある。当時、このような仕事は軍にとって余計な労作が増えるだけであつたろうが、今日であれば経常外の収入につながるということで歓迎されたかもしれない。

というのは、従来見向きもされなかったネズミの皮を商品化し、換金性をもつようにした人たちがいるからである。その革新的ともいえる発明の主は、皮職人のマフムッド・H氏(36歳)と農業を営むライム・A氏(51歳)の2人。

ネズミの皮を活用しようと最初に取り組んだのはライム氏で、これを技術面で製品化したのはマフムッド氏である。ライム氏は西部ジャワ州インドラマユ市カラナムペル村に住み、同村をカバーするタニムクティ組合の組合長をしている。同氏は例年稲刈の時期になると、何千匹ものネズミによる被害が発生するため、対処策に頭を悩ましていた。多数の住民を動員してネズミ狩りを行なうべく提案したこともあるが、これは死骸の処理が問題だということで、賛意を得られなかった。

1988年8月のある日、ライム氏は一層のこと、ネズミの皮を利用してしまおうと思いたち、早速実験にとりかかる。まず、ネズミ10匹を殺して皮を剥ぎ、次いで皮についてる脂肪を食塩で除去し、石灰水のなかに72時間浸し、毛を取ってから $K_2Al_2(SO_4)_4$ で洗い、日陰で乾燥、最後に好みの色に染めあげてみた。この方法は、牛や山羊の皮のなめし方と同様だが、これだけでは商品としての価値はない。そこでライム氏は、ヨグヤカルタ市皮工芸専門学校(ATK)を1976年に卒業し、79年から各種動物の皮革製品作りを手がけているCVペルダナ・レーザーチレボン社のオーナーであるマフムッド・H氏にネズミ皮を素材にした製品の研究開発について相談をもちかけた。

マフムッド氏は中部ジャワチレボン県ウェル市セトゥ村の自宅に作業場を併設し、ヨグヤカルタ市工芸専門学校の卒業生7人と共同して牛、山羊皮のなめしを行うほか、皮革製品の商品開発に取り組んでいるので、ライム氏の希望には十分そえる相手である。

ライム氏が自ら組合長をしているタニムクティ組合がネズミ供給をし、CVペルダナ・レーザーチレボン社側がそれを加工して商品化する、という両者の試みは、よい方向に発展してきている。

マフムッド氏によれば、今日までにジャンパー、婦人用バッグ、スカート、ベルト、メガネ拭き、ゴルフ用手袋などを商品化してきたとはいうものの、これらは専門のデザイナーによってデザインされていないので、今後は専門家によるデザイン化が必要、また、品質も向上させなければならないという。これらの用途開発は、成果いかんで害獣としての存在でしかなかったネズミの価値をプラスの方へ変えてしまうかもしれない。

いま、ライム氏のお膝元であるカラナムペル村の農民たちは、最低でも毎月合計2万匹のネズミを捕獲する目標をたて、それをタニムクティ組合が一匹40ルピアで買い上げると約束し

ている。また、最近ではネズミがカネになるならばと、近隣のアンジャヤタン村やハウルグリス村でもネズミ狩りを行う農民が増えてきているという。ネズミはどこの農村にもかず多く生息しているから、もし、ネズミ皮製品が大量に売れるという当面の夢が現実になったとしても、皮不足に陥ることはないであろう。

ただ、商品として広く普及するには、ネズミに対するマイナスの先入観に加え、コスト、品質、デザインなどに更なる工夫が必要だとマフムッド氏はいう。同氏のところで製作してきている商品のなかから、一例としてヨーロッパサイズのジャンパーを紹介してみよう。

同ジャンパーを一着作るには220匹分のネズミ皮が必要になる。一匹当りのコストはタニムクティ組合からの買い取り価格が生皮で50ルピア、なめし代が75ルピア。製品になるまでの縫い代、ボタン代、ジッパー代まで含めると、おおよそ12万ルピアかかるので、現状での販売価格は15万ルピア以下にはできないようだ。これに対し、アジアサイズは小さいため、使用皮が少なくてすむので、販売価格の方も8万ルピア程度におさまる。しかし、山羊や牛皮製のジャンパー4～5万ルピアに比べると相当に高く、既存皮と価格競争ができるまでには至っていない。

マフムッド氏もこのコスト高が最大のネックだとの見方をしており、今後はネズミの買い取り価格を下げるなどしてコストを下げる努力をするという。そのうえで広く知られるようになれば、魅力的なビジネスに発展する可能性は十分にあると将来に期待を寄せている。同氏はまた、現行のネズミ獲りにかわって、将来は飼育・増殖が盛んになるだろうとの予測もしている。

ネズミの皮革工程

プロセスは簡単。まず、畑にネズミの巣を探す。捕えたネズミの首と尾を切り、この切り口から皮を剥ぐ。剥ぎ取った皮は、カランアムペル村のタニムクティ組合、またはCVペルダナ・レザー・チレボン社に売る。肉は、細かく切り刻み家鴨の餌にする。

CVペルダナ・レザー・チレボン社のオーナーであるマフムッド・H氏は、皮をなめすための機械設備の他に、縫い合わせるためのミシン、そして2000㎡の広さのある展示場まで所有している。チレボン県ウェル市セトゥ村にあるこの工場で、ネズミの皮は新素材として開発されたのである。

農民より買取った皮に適当な量の塩をかける、これは悪臭および劣化を防止するためである。皮がある程度の量になったとき、重さを計り、水で塩を洗い流した後、本来の弾力性を取り戻すため、1晩水に浸ける。ここまでの工程は、ソーキング (soaking) という。次にライミング (liming) という工程に入る。皮に付いている毛を剥ぎ、毛穴を大きくするため、石灰および硫酸が含まれている水に皮を1晩浸ける。石灰の量は皮全体の重さの7%硫酸は皮全体の重さの2%である。

次には、デライミング (deliming) という工程に入る。皮は、石灰の入った水で3時間洗い流した後、皮の標準的なpHであるpH7の値を得るため、それぞれ1%の酢酸、硫酸およびZA肥料混合の液体を浸ける。バッチング (bating) 工程で、皮をオロフォンが含まれている液体に2時間入れ、柔らかさを取り戻す。脂肪を取り除くため、ディグリーシング (degreasing) 工程を行なう、10%のチボールが含まれている液体で皮を洗った後、きれいな水で1時間水洗いする。

その後の工程はピクリング (pickling) という。ここでは、皮のpH値を7から3.5に下げる。

方法は、皮を塩15%、硫酸1/2%を含んだ液体に入れる。その後、クロモジオキシダ10%の液体に6時間浸し、次に、樽にケーキ用のソーダー1%を含んだ溶液を作り、皮を入れる、液体を全体に染み込ませるため、1時間かきまぜた後、そのまま1晩置き、翌日皮を自然乾燥させ、やすりで厚みを揃える。

染色には、2%のジスタフ（diestuff）が含まれている液体を使い、温度を40°に上げ、皮を1時間入れる。柔らかな皮が得られるように水温40°の水に5%のunsulfonated油を混ぜ、皮を入れる、その後、酢酸0.1%の水でunsulfonated油を洗い流す。

最後に、皮を風通しのよい場所に2晩乾燥させ、ピンと伸ばし、釘で止めて1時間乾燥させる。

それらの工程に使用する材料は、化学品を取扱っている店で安く手に入る。器具も自家製、樽は使用済みのドラム缶を利用すれば良い、混ぜるときも手動。それより大事なことは、皮の臭いおよび排水から住民を守るため、加工場所は住宅街より外れた所で行うとよい。

※本文はインドネシアで発刊されているインドネシア語の週刊誌「EDITOR」（1989.8.5発行、No. 48）のなかの記事を、当協会の研修事業に通訳として協力いただいているMUHAMAD SURYA氏が要訳したものである。

原文のタイトルの日文訳は「ネズミの皮で新しい産業」とあり、内容もネズミ皮を活用した製品が開発され、皮革製品の素材として、将来を有望視する調子で書かれている。

果して、ここに紹介されているように商売として発展する可能性が大なのか。そう簡単にはいかないと思われるが、それはそれとして、このような取り組みをしている人たちがいることは興味深い。（編集部）



◇◇◇◇「海外農林業開発協力促進事業」制度のご案内◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

民間企業ベースで農林業投融资を支援

- (1) 本事業は、開発協力事業の推進等本邦民間企業の農林業分野における海外投資を促進することを目的として、昭和62年度から(社)海外農業開発協会が実施している農林水産省の補助事業です。
- (2) 本事業の概要及び適用事例については右の図に示したとおりで、貴社でご検討中の発展途上国における農林業開発事業についてのご相談に応じることができます。
- (3) 民間企業のメリットとなる本事業の特徴は以下のように整理できます。
- ① 海外農業開発協会のコンサル能力を利用できる。
 - ② 現地調査経費、国内総括検討などにかかる経費を節減できる。(1/2補助)
 - ③ 本事業の調査後、開発協力事業等政府の民間融資制度を利用する場合には、その事務がスムーズに進む。
- (4) 本事業による調査後、当協会は貴社のご要請に応じて、政府系融資資金の調達のお手伝いをします。
- (5) なお、平成元年度の本事業による調査実績は次のとおりです。
- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1) 南米加工用野菜生産事業調査 | 6) フィリピン植物性精油生産事業調査 |
| 2) 南西アジア油糧作物生産事業調査 | 7) インドネシアチップ生産事業調査 |
| 3) タイ国うるし生産事業調査 | 8) ネパール加工花生産事業調査 |
| 4) フィリピン粗飼料生産事業調査 | 9) アルゼンティンパルプ生産事業調査 |
| 5) ラオス野菜生産事業調査 | 10) インドネシア野菜種子生産事業調査 |

相談窓口：(社) 海外農業開発協会
第一事業部
TEL 03-478-3508

農林水産省
国際協力課開発協力班
TEL 03-502-8111 (内線 2776)

民間企業・団体

海外における農林業投資案件の検討

(例1)

農作物の栽培事業の実施に当たって対象作物、対象地域等企業内における基礎的検討が必要

(例2)

農畜作物の生産・輸出事業の実施に当たって、当該品目について栽培～加工～流通まで広範な領域についての検討が必要

(例3)

現地関連法人から遊休地の有効利用について協力依頼を受けており、農林業開発の可能性の検討が必要

(例4)

企業内において農業開発の方向性が定められており、詳細な事業計画の策定が必要

海外農林業開発協力促進事業

(農林水産省補助事業、補助率：1/2)
(社団法人 海外農業開発協会が実施)

農林業投資案件の発掘・形成

1. 現地調査 (当該企業・団体の参加も可)

2. 国内検討 (専門家による検討)

↓
調査報告書

調査経費の負担

国内検討、現地調査及び報告書作成にかかる総経費の1/2を補助

資金調達先

JICA

(開発協力事業)

OECD

輸銀

その他

—— アジア経済研究所・月例講演会 ——

□日時：平成2年9月21日（金） 午後2時～3時30分

□テーマ：タイ農村はいま
—— “ゆるんだ社会” からの変容 ——

□講師：重富 真一氏（総務部）

（昭和63年から在バンコク海外派遣員としてチュラロンコン大学で「タイ農業の市場と組織」について調査研究し、本年6月に帰任）

□会場：アジア経済研究所国際会議場

〔地下鉄新宿線曙橋下車（A3出口左方向）

徒歩3分または丸の内線四谷3丁目下車徒歩10分〕

※聴講無料

※申し込み・問い合わせ先

アジア経済研究所・広報部・広報課

東京都新宿区市谷本村町42

電話03(353)4231 内線248

—— 国際農業機械化研究会・第18回海外講座 ——

□日時：平成2年9月27日（木）～28日（金） 午前10時～午後5時

□テーマ：改革進むソ連・東欧の農業と機械化

□講師：平泉 公雄氏（アジア経済研究所地域研究部研究員）

暉峻 衆三氏（前宇都宮大学農学部教授）

柴崎 嘉之氏（農林水産省農業総合研究所企画連絡室長）

谷江 幸雄氏（岐阜経済大学経済学部教授）

坂本 楠彦氏（作新学院大学院経済学部教授）

□会場：新農林社3階会議室

※聴講料 会員15,000円 一般20,000円

（講演要旨、参考資料、昼食2食代を含む）

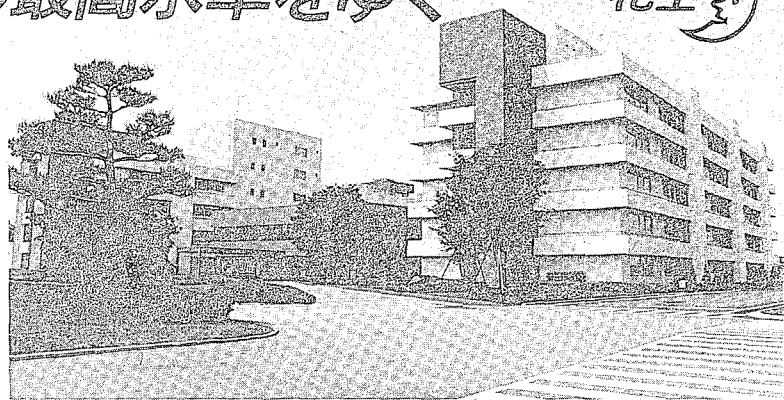
※申し込み締切り 平成2年9月20日（木）

※問い合わせ先 〒101東京都千代田区神田錦町2-7

電話03(291)5718

化学工業の最高水準をゆく

花王 



◎清潔な暮らしに…家庭用製品

石けん、洗顔料、全身洗淨料、シャンプー、ヘアリンス、ブラッシング剤、トリートメント、ヘアスプレー、ヘアブラシ、ヘアカラー、顔・ボディ用クリーム、スキンローション、ハンドクリーム、制汗・防臭剤、衣料用洗剤、食器用洗剤、クレンザー、住居用洗剤、柔軟仕上げ剤、漂白剤、帯電防止剤、糊剤、消臭剤、殺虫剤、歯みがき、歯ブラシ、生理用品、化粧品、紙おむつ、入浴剤、肛門清浄剤

◎産業の発展に…工業用製品

脂肪酸、高級アルコール、脂肪アミン、脂肪エステル、グリセリン、食用油脂、界面活性剤、食品乳化剤、繊維油剤、製紙薬剤、農薬助剤、プラスチック添加剤、帯電防止剤、コンクリート減水剤、潤滑油添加剤、鉄鋼洗淨剤、圧延油、不飽和ポリエステル樹脂、ポリウレタン樹脂、複写機用トナー、フロッピーディスク

栃木研究所

花王株式会社

〒103 東京都中央区日本橋茅場町1-14-10



いろいろな国があり、

いろいろな人が住む、

私たちの地球。

しかし豊かな明日への願いは同じ。

日商岩井は貿易を通じて

世界の平和と繁栄に、

貢献したいと願っています。

**We,
The World
Family**

日商岩井のネットワークは

世界160都市を結びます。

 **日商岩井**

海外農業開発

第 162 号

第 3 種郵便物認可 平成 2 年 8 月 15 日発行

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS